



送水こうた

---

---

熱海に建てられたH侯爵家の別邸に仕えるフキという女中が、庭から飛び立ち近所の家の敷地に迷い込んだスクリーマーを迎えに行つたのは、国内でも戦争の影が色濃くなりつつあった、一九四〇年（昭和十五年）の五月半ばのことであつたという。

スクリーマーというのは南米原産の鳥のことだ。「サケビドリ」という和名の通り、独特の鳴き声をしている。鳥学や辺境の探検にのめり込んでいたH侯爵家当主のM氏が、コロンビアからわざわざ買入れたものである。

「ほら、こつちですよ」

別邸に報せに來た家人に案内されて行くと、庭の片隅にフキの腰ほどもある大きさの、真っ黒な羽をした鳥が佇んでいた。この鳥を初めて見た者は大きさや鋭い爪、けたたましい鳴き声に圧倒されてしまふが、実に大人しい性格である。迎えに來た女中の顔を覚えているようで、フキが頸を撫でると、鳥は素早く嘴を打ち鳴らした。

「あなた、いつも大変だねえ」

「いえ、もう慣れたものです」

この鳥が迷子になるのは、今回が初めてではない。ふかふかと温かい羽毛を抱え上げ、元來た道を引き返す。洋風の黒いワンピースに白いエプロン姿の女中が、大きな鳥を抱えて歩く姿は道行く人の目を引いた。坂を登った先、五月の晴れた空の下に、すらりと背を伸ばした椰子の木と、真白く輝く塔を抱えた赤い屋根を持つ洋風の屋敷が見えた。

これが、H侯爵家の別邸である。

現当主の結婚にともなつて新築したスパニッシュ様式の建物で、敷地の中には南方の植物が植えられ、庭や池、温泉を引いた温室で珍鳥や奇魚の類いを飼い慣らしており、まるで南の海に浮かぶ楽園の島といった趣であつたそうだ。門から玄関へ続く小径の両脇には、一輪の中に赤や桃色、橙色等とりどりの色が混じつたランタナの花が咲いている。その甘い香りの中を進んでいくと、丸いアーチ型の玄関扉の前に、一人の青年が立っていた。

「あの……」

どちら様ですか？ と声をかける前に、抱えたスクリーマーが「クゲエエ」と鳴いた。

「！」

突然背後から聞こえた奇声に、青年は飛び上がって振り向いた。十八歳のフキよりいくらか年上に見える。凜々しい眉と長い睫毛の目立つ、彫りの深い顔立ちが印象的だった。しゃんと伸びた背に似合わぬシワの寄ったジャケットと、腕に抱える角張った風呂敷包みがフキの気を引いた。

青年は女中の腕の中にいる大きな黒い鳥を見て二度驚いたらしく、目を見開いて固まった。

「すみません。この子は声は大きいですが、とても大人しい鳥で……」

「……」

青年はカカカ、と小刻みに嘴を打ち鳴らしている鳥をじつと見つめている。知らない者から見れば威嚇にしか見えなまいだろう。

「おどしている訳ではなくて、甘えているんです！」

「ああ、そうでしょうね」

フキが必死に弁明しようとする、彼はぶつきらばうに答えた。

「と……ところで、どのようなご用事ですか？」

「もうお構いなく。押し売りは結構、と門前払いされたば

かりですので」

「まあ！」

なんとか相手の警戒を解き、用件を尋ねることに成功したと思ったら、この素っ気ない返事である。しかも、客人ですらなかつたなんて！ フキが腹を立てて青年を見遣ると、彼は自分以上に憤懣遣る方ない顔をしていた。

青年は風呂敷包みを抱え直し、足早に屋敷を出て行く。なかなか腹の虫が治まらないフキは、しばらく遠ざかる背中をにらんでいた。

夜、女中部屋の灯りを消すまでの短い自由時間のこと。女中たちが手紙を書いたり、繕いものをする中、フキはこっそり古びた本を取り出した。ルイス・キャロル作『不思議の国のアリス』という西洋の児童書で、彼女の家が裕福だった頃の数少ない名残だ。貿易会社を営んでいた祖父は、幼いフキに珍しい海外の本や骨董品をいくつも贈ってくれた。戦争や震災、金融恐慌で今やすっかり落ちぶれてしまい、祖父の蒐集品の大多数は処分してしまったけれど、フキはこの本ともう一つの【宝物】だけは頑なに手放

さず、「行儀見習い」の名目で女中奉公に出される時も、忘れずに持ち出して来た。

眠る前にこの洋書をこっそり眺めるのがフキの習慣である。ジョン・テニエルが描いたアリスに白ウサギに、チェシャ猫、へんてこお茶会とハートの女王……。とりわけ序盤に出てくるドードー鳥には思い入れがある。侯爵家に来たばかりの頃、フキが応接間に掛かった太った鳥の絵を見て、「あら、ドードーだわ」というひとりごとを聞いた侯爵が「君もこの鳥を知っているんだね」と大層喜んだのだ。南の海に浮かぶ、楽園のようなモーリシャス諸島に住んでいた、飛べない鳥ドードー。

侯爵はその研究を終生の課題と定めていた。とめどなく披露されるうんちくは覚えきれなかったが、興味深い話ばかりだった。フキはまた機会があれば、二百年ほど前に地球上から消えてしまった鳥について、主人に尋ねてみたいと考えている。

話を戻すが、フキは今日に限ってこの日課に気が乗らなかった。昼間に出会った青年のことが頭から離れなかった。せいだ。

青年の素性は分からないが、冷静になってよく考えてみ

ると、彼の無礼な態度にはそれなりの理由があったように思えてくる。

（あの人、行商するのに慣れていなかったわ）

家々を回って行くでもないものを売りつける行商人にとっては、門前払いも日常茶飯事のはずである。フキが知る押し売り連中というのは、塩を撒いて追い返しても、もっと飄々とした態度の者ばかりである。服装だって、手入れの不完全な上着を着込んでいたのは、華族の邸宅を訪ねるのに礼を欠かないようになんとか準備したものに思えた。

（どんな事情があるのかしら）

ふとそんな考えが頭をよぎる。不思議の国の住人たちは不条理なことばかり言つてアリスを怒らせるけれど、あの青年にとつて、無礼なのはろくに話しも聞かずに扉を閉めた侯爵家の使用人だったのかもしれない。

同室の女中が灯りを消すというので、フキは慌てて枕の下に本をしまい込み、布団を被つて目を閉じた。

翌日、青年はまた屋敷を訪れた。